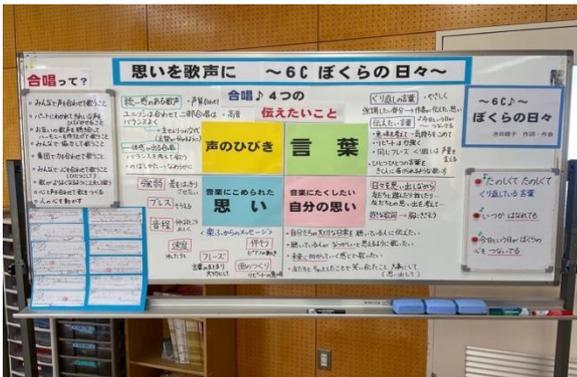


## 本実践・研究から見えてくること

研究協力者 吉澤 恭子 川辺 茜  
(秋田大学教育文化学部 初等中等教育講座)

教師は教材を選択する時点で、どのようなアプローチで児童に音楽的な学びと実践を体験させることができるかと思いを巡らせながら指導計画を立てることが多いと思われる。本提案授業では教科書掲載曲《ぼくらの日々》を教材とし、6年C組のクラス全員による声のアンサンブル（合唱）をよりよく仕上げていくための表現づくりを中心に据えた活動が展開された。

### 言葉と音楽：表現を思考する力の育成



授業実践における協議の視点は「こんなふうに歌いたい」という思いと音楽的な根拠を関連付けて伝え合う場の設定は、よりよい表現を目指す子どもの姿を引き出していたか」という点にある。児童ひとりひとりが歌詞の内容を感受し、歌の旋律と音楽的な根拠（強弱、強調、ニュアンス等）をもって歌唱表現の工夫に直結させていく音楽科ならではの思考力が、様々な対話を通して磨かれていた。

### 小中連携：身近な歌手の活用

表現を工夫するという事は「特定の答えがない課題」に向き合うことでもある。児童が自分なりの答えを見出そうとする過程には「(自分・他者・音・音楽との)対話的な学び」が寄り添い、聴覚を働かせながら様々な思考を生じさせている。授業の後半では、「身近な歌手」が児童の対話的な学びの相手として登場した。身近な歌手とは、ゲストティーチャーでもある附属中学校の生徒である。生徒のピアノ伴奏に合わせて、少人数のアンサンブルで《ぼくらの日々》を披露してくれた。いくばかりか大人びた声質と表現力のある中学生の歌声に聴き入っていた様子が、音楽に対する価値や意識を更新していく児童の姿に重なった。自律した学習者が育つことを期待する本授業デザインにおいて、よりよい表現を目指そうとする児童の「気づき」を引き出すゲストティーチャーが教師の「仕掛け」である。小中連携が寄与する音楽科の優れた授業実践であった。(吉澤)

### 歌唱表現を工夫するための視点と方法

公開研究協議会の後半では、「《ぼくらの日々》を歌う体験を通して、歌詞に込められた感情を音楽表現に結びつけるにはどうしたらよいか」をテーマに、ワークショップを実施した。歌唱指導においては「表現の工夫」を求める場面が多いが、実際に何をどのように変えればよいか、児童の思いや意図を実現させる音楽表現の方法を具体的に示すことは容易ではない。そこで本ワークショップでは、教師が課題と感じやすい歌唱表現の具体化と言語化の充実を目指して実施した。

まず、「表現の工夫とは何か」「児童の思いをどのように具体的な歌い方へ反映させるか」といった疑問を共有し、参加者との意見交換を行った。その中では、リズムや音程、ハーモニーなどの音楽の諸要素を根拠にしたり、詩のイメージを膨らませる支援をしたり、言葉の言い方やニュアンスを考えるなど

の手立てが挙げられた。これらを整理し、①歌詞（単語やセンテンスの意味）から考える、②詩全体から感じ取った思いをもとにする、③和声や旋律、リズム、構造など音楽的特徴から読み取る、の三つの視点を表現の拠り所として提示した。さらに、「ああ」という感嘆詞に多様な感情を込めて発声する、感情表現のエクササイズを行い、同じ言葉でも発語、抑揚、息の使い方、身体の状態、表情などの違いによって多彩な表現が可能であることを体験的に確認した。

次に実際の表現の工夫の手立てについて検討した。例えば、「強弱をつける」という場合にも、「勇気がみなぎるような *f*」と「怒りをぶつけるような *f*」では強さの質が異なるように、強弱の内容を言語化することが表現の具体化に有効であることが共有された。あわせて、「はずむように」や「哀しげに」等のイメージを、実際の声の表現に結びつける視点として、「発語・発音」「息・響き」「身体の状態」「表情」の四点から実践例を紹介した。感覚的・情緒的なイメージを可視化・言語化し、具体的な指導の方法へと結びつけることは、音楽科教員の指導力向上にもつながるものと考えられる。

本ワークショップを通して、歌唱表現の拠り所となる視点と、それを実現するための技術との関係について理解を深めることができた。このような取り組みが、児童のより豊かな歌唱表現を支える指導の充実につながることを期待したい。今後も附属学校園と連携し、児童生徒の思いを具体的な表現へと導く指導や支援の在り方について継続的に研究していく。(川辺)